

---

# 善意の殺人者

あゆみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

善意の殺人者

### 【Zコード】

N7780R

### 【作者名】

あゆみ

### 【あらすじ】

いじめられている訳じゃない、でもひとりぼっち。  
そんな私に話しかけてきたのは、自称魔法使いでした。

(前書き)

これも高校の時に書いたものです。

休み時間、あたしは鞄から文庫本を取り出し、そのついでに教室をぐるりと見回した。この世界に、あたしの居場所はどこにもない。

あたしはいつも一人。友達もいないし、お情けで話しかけてくれるような子もない。可愛くないし、チビだし、暗いし、勉強も出来ないし。いいトコなんてどこにもない。毎日毎日、楽しくない。学校に行つても、目立たないよう自分の席に座つて本を読んでいるだけ。休み時間が嫌い。グループ活動も嫌い。楽しそうに笑っている人を見ると腹が立つ。ただ羨んでいるだけなんだって、分かってはいる。そんなことで、人を恨んじゃいけないってことも分かってる。だつてこれは、自業自得。誰にも文句は言えない。人みしりが激しくて、他人と話すときは緊張してじもじしてしまうし、うつかりいらないようなことまで言つてしまつ。これは他の誰のせいでもない。単純に、私の性格の問題だから。

だけど、いきなり性格を変えるなんて出来るはずもない。今までうつむいて教室に入つていていたのに、いきなり笑顔で「おはよう!」なんて言える? あたしは言えない。気づかれないように自分の席についてすぐ本を手に取つていたのに、明るく話しかけたりなんかできる? 出来るわけがない。

あーあ、魔法使いでも現れないかしら。杖をさつと振つて、この真つ暗な人生をぱあつと華やかにしてくれる魔法使い。シンデレラに出てくる魔法使いのおばあさん。出来れば、永遠に続く魔法。誰か、掛けてくれないかしら。

「ね、君。今、変わりたいと思つたでしょ?」  
後ろから、囁くような声。あたしは驚いて振り返つた。  
「思つたよね?」

……同じクラスの子だ。えと、名前は……。

「僕はね、魔法使いなんだよ。考えていることが、分かつちゃうんだ。」

「魔法使い？」

「放課後、屋上に来てよ。魔法を掛けてあげる」  
彼はそう言つて、友人の方に駆けていった。……彼の名前、なんだったつけ。

「やあ、来たね」

「魔法使いつて……、なんか、ちょっと気になつたから  
彼はにこっと笑つて、ポケットの中に手を突っ込んだ。  
「僕の名前、分かる？」

「……」

少し間をおいて、あたしは左右に首を振つた。ごめんなさい、と  
わざかに目を伏せる。……同じクラスなのに、なんだか申し訳ない。

「そつか。そうだよね。分からぬよ。いつも他人に興味なんか  
ないつて顔してつまらなそうにしているのにたまに羨ましくて堪ら  
ないつて表情をするんだ。そのくせクラスの人の名前すらまともに  
覚えてなくて、自分をかまつてくれない周りの人たちをちょっと恨  
んだりしているんだ。でもそれがいけないことだつて言つるのは自分  
でもわかっているんだよね」

あたしは呆然と、彼を見つめる。

「でも自分で何とかしようとは全然考えなくて、誰かどうにかして  
くれないかなーって他力本願なことを思つてるんだよね」  
につこりと、彼は笑つた。

「君は一度死んだ方がいいよ。自分で死ぬ勇気がないなら、僕が殺  
してあげるよ？ 大丈夫、ちゃんと、あんまり痛くないようにして  
あげるから」

ポケットから、ナイフが出てきた。先の鋭い、小型のナイフ。  
こんなもので、本当に人が死ぬんだろうか。刃渡りは精々十センチ程度。ああ、でも彼はなんだか慣れていそうだし、上手くやるのだろうか。

「今さ、死にたくないとも思わなかつたでしょ？ やつぱり死ぬべきだね。死にたくないって思わなくなつたら、人間は終わるんだよ」

「歩、歩、三歩。

ゆつくりとあたし近づいてくる。

「歩、二歩、三歩。

ゆつくりとあたしは後ずさる。

「じゃあね」

冷血な声。迷いのない動き。あたしは、動けなくなつた。足が動かない。……どうして？……どうして？

怖い！

かしょん。

「…え？」

腹部に、わずかな衝撃。ただ軽く、腹部を叩かれたような、そんな感じ。

「…あれ？」

ナイフの刃は柄の方に引っ込んでいた。

「……さて、君は今死んでしまいました。お腹にナイフを刺されて血みどろです。そのままぼつくり死んでしまいました。……二、一、一。はい、今君は生まれ変わりました。今までをリセッシュする」とができます。どうしますか？」

彼はあんぐりと口を開けたあたしの頭を撫で、どうするの？と首を傾げた。

「あ、たし……は、」

「『あたしは』？」

「あたしは、変わりたい。……あたしは、変わりたい！！」

「じゃあ、変われるね。君ね、前髪切つてコンタクトにするだけで大分可愛くなると思うよ。それから、とりあえず誰かに話し掛けてみなよ。みんな、結構気さくな人ばかりだからさ」

へたと、あたしはその場に座り込んでしまった。彼はじゃあね、とさつきと同じように言って、あたしに背を向けた。あたしはしばらくそのまま、動けなかつた。心臓がうるさくて、今更ながら死にたくなかつたな、と思いつた。

……変われるのだろうか。あたしでも。

いやきつと、変われる。変わらなきや。

取り敢えず、髪を切りに行こう。それから、コンタクトにしよう。そして……、そしてそれから、みんなの名前を覚えよう。まずはちゃんと、彼と自己紹介がしたいから。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7780r/>

---

善意の殺人者

2011年3月20日22時13分発行